

Abstract: More observations on the old Nepalese Manuscripts of the Suśrutasaṃhitā

Kengo Harimoto

This is a followup to a previous report on the palm-leaf manuscripts of the Suśrutasaṃhitā preserved in Nepal. There are three such manuscript; none of them is complete. One of them is dated to 878 C.E and was inscribed to the UNESCO Memory of the World Registry in 2013. I have so far pointed out that the three manuscripts are witnesses to a version of the Suśrutasaṃhitā hitherto unknown. That is, the manuscripts are closely related, transmitting essentially the same text from the 9th century. I have also reported that they provide insight into the development of the text. One of the possible outcomes of studying these manuscripts is a recovery of more original states of the text, compared to editions currently available. In the current paper, I will elaborate on some of these topics.

This report consists of three parts. The first part will discuss some linguistic features found in the text of those manuscripts. They may hint at the provenance of the original composition.

The second part deals with further questions about the relationship between manuscripts. The discussion includes the examination of a complex situation where a codex currently preserved as one in fact consists of folios from different origins. This situation may tell us how the text known in Nepal and another heavily modified version interacted.

The third part widens the focus and discusses the development of the Suśrutasaṃhitā itself, not just in Nepal. We can glean some information regarding how the text evolved from the Nepalese manuscripts. The discussion will include the status of the Uttarantra, widely considered to be a later addition, in 9th century Nepal. If we compare the order of chapters in the Uttarantra with the list of contents at the beginning of the text, 1.3, a very curious picture emerges.

In the end, I will discuss the possibility of an edition based on the Nepalese manuscripts. Questions about its viability and significance will be raised. I will try to answer those questions.

氏名：和田壽弘

所属・職名：名古屋大学大学院文学研究科東洋学講座インド文化学研究室・教授

発表題目：「新ニヤーヤ学派における定動詞語尾の意味について——ガンゲーシャの最終的主張——」

発表要旨：新ニヤーヤ学派 *Navya-nyāya* の言語理論の体系はこれまでこの学派の綱要書類を使って言及されることが多く、学派の体系を確立したガンゲーシャ（14世紀頃）の『タットヴァ・チンターマニ』 *Tattva-cintāmaṇi* の要約はあるが、纏まった該当箇所（一つの章の全体）を扱いつつ、言語理論の基本的部分を解明しようとするものはなかった。綱要書に言及される理論は、当然のことながら、後代の解釈も入り込む可能性が高く、思想史研究の資料としては必ずしも全面的には依存できない。本発表は、綱要書に展開された理論とは異なるガンゲーシャの理論の一つを、彼の『タットヴァ・チンターマニ』「言語部」*Śabda-khaṇḍa*「定動詞語尾章」*Ākhyāta-vāda* の全体を見通して明らかにする。

この章は、定動詞語尾の意味を議論したものではあるが、それ以外のテーマ、例えば、文章を聞いて（あるいは読んで）どのような理解が発生するのかというような、言語認識に関する基本的な知識も提供するために、言語理論の導入部分としての役割も果たす。新ニヤーヤ学派の綱要書の幾つかでは、言語に関する議論の冒頭に定動詞語尾の意味に関する議論が置かれることから、この議論が上述のような重要な役割を果たしていることが裏付けられる。

ガンゲーシャの「定動詞語尾章」は次の八部分に分割される。(1) 導入：ニヤーヤ学派の主張、(2) ミーマンサー学派の主張、(3) ニヤーヤ学派の反論、(4) 『ラトナ・コーシャ』作者の主張、(5) 『ラトナ・コーシャ』作者への反論、(6) 文法学派の主張、(7) 文法学派への反論、(8) ニヤーヤ学派の主張の詳細、である。さらに、(8) は (8.1) ニヤーヤ伝統説 (*saṃpradāyah*)、(8.2) 新ニヤーヤ説 (*navīnāḥ*)、そして、“*vayaṃ brūmah*”（我々は[次のように]主張する。）で始まる(8.3)ガンゲーシャの最終説に分けられる。(8.3)では、受動態語尾は<第一格語尾を有する語によって表示されるものに内属する行為の結果を有すること>という行為目的性 (*karmatva*) を表示し、能動態語尾は行為者性 (*kartṛtva*) を表示する、と述べられるのみであり、(1) から (8.2) までの議論に対するガンゲーシャの態度は不明である。もし (8.3) だけがガンゲーシャの最終的主張だとすると、多くの問題が未解決となってしまう。一方、(1) から (8) までの部分でガンゲーシャが否定しなかった説も彼の承認するものと考えれば、それ等の問題に対する彼の回答と見なしうる。従って、「定動詞語尾章」の最後に (8.3) のみを述べれば事足りた、と推定できる。本発表では、彼が否定しなかった説を八つの部分から回収して、彼の最終的主張を再構成する。

<名前> 丸井 浩

<所属・肩書> 東京大学 大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学研究室）・教授
インド思想史学会理事

<発表題目> 「prāmāṇya という概念を考える—『シュローカ・ヴァールツィカ』教令章を中心に」

<発表要旨> インド哲学諸派が議論を交わす論争（vāda）のトピックの一つに prāmāṇya-vāda というものがあり、「真理論」あるいは「真知論」などしばしば訳される。そしてミーマーンサー学派は自律的真理論（自律的真知論 svataḥprāmāṇya-vāda=知／認識は本来正しいものであり、外的要因が加わることで誤知性が他律的に付与される、そして誤知であることを知らしめる認識が生じない限りは、いかなる知／認識も真であると考えてよいという理論）を、ニヤーヤ学派は他律的真理論（他律的真知論 parataḥprāmāṇya-vāda=知／認識は本来正しくもなく誤ってもおらず、外的要因によって真偽値が他律的に付与されるという理論）を展開するという事実はよく知られているところである。

しかしながら、prāmāṇya-vāda として括りうる議論がまとまった形で初めて提示されるクマーリラ作『シュローカ・ヴァールツィカ』教令章の内容をよく見ると、知／認識が真知であること（jñāna-prāmāṇya）は知／認識に本来そなわっている性質であることを論証する議論は、シャブダ、特にヴェーダは本来的、自律的に妥当な認識手段であることを確立するための前提をなしているように思われる。つまり知の真知性が自律的であることと、シャブダ（ヴェーダ）の認識手段としての妥当性（śabda-prāmāṇya/veda-prāmāṇya）が本来的、自律的であることが、ある種並置されたうえで、知の自律的真知性の論証からシャブダ（ヴェーダ）の自律的妥当性の確立へと向かう議論構成こそが、クマーリラが『シュローカ・ヴァールツィカ』教令章において展開した prāmāṇya-vāda の一大特徴と見るべきであろう。このことは、多くの点でミーマーンサー（特にクマーリラ）の影響が強く及んでいると思われるジャヤンタの『ニヤーヤ・マンジャリー』中の反対主張に登場する svataḥprāmāṇya-vāda の構成が、基本的に同一であることから裏付けられる。

従来の研究では、prāmāṇya-vāda をもっぱら知の真知性が自律的か、他律的か、という議論として捉えてきたために、明らかにシャブダに備わる属性としての prāmāṇya が議論されている箇所においても、真知性の概念を読み取ろうと原文解釈に苦慮してきた形跡がある。しかしその場合の prāmāṇya は、シャブダの認識手段としての妥当性を意味していると理解すれば、解釈上の困難は解決されるであろう。

また以上の所論が正しいとすれば、prāmāṇya-vāda における prāmāṇya という概念は pramātva（真知性）を意味する—という J. N. Mohantīn の主張そのものを、大きく見直す必要が出てくる。そればかりでなく、そもそも prāmāṇya という概念が、後代の文献のように、はたして pramā-karaṇatva として理解してよいのか、という大きな疑問が浮かび上がるように思われる。その点にも若干触れたい。

会場アクセス



近くの駅から山上会館まで

地下鉄丸ノ内線	本郷三丁目駅	徒歩 13分
地下鉄大江戸線	本郷三丁目駅	徒歩 11分
地下鉄千代田線	根津駅	徒歩 8分
地下鉄南北線	東大前駅	徒歩 8分

タクシーでご来場いただく場合、東京駅からは「東大正門」まで（2,000円程度）、上野駅からは「東大病院」まで（1,000円程度）、とお伝えください。

関西方面からお越しの際は、新幹線東京駅で東京メトロ地下鉄丸ノ内線に乗り換え、本郷三丁目駅で下車、そこから徒歩にてご来場いただくのがよろしいかと存じます。